

ケムニッツの労働者運動とドイツ機械製造工 カンパニー（1863—67年）（上）

——1860年代ドイツの労働者運動と生産協同組合(2)——

山井敏章

問題の設定

I. 革命後の労働者運動と地域的特質—概観—

1. 革命後の労働者組織
2. 各地の労働者運動
 - (1) 西南ドイツ
 - (2) バイエرن
 - (3) ヘッセン
 - (4) 北ドイツ
 - (5) プロイセン
 - (6) ザクセン

II. ケムニッツの労働者運動

1. 革命後の諸組織と1860年代初めの政治状況
2. ケムニッツ労働者教育協会（以上本号）

III. 1862/63年の労使紛争とドイツ機械製造工カンパニー

1. 1862/63年の労使紛争
2. ドイツ機械製造工カンパニー
 - (1) 成立と成員構成
 - (2) シュルツェ=デリッチェ
 - (3) 発展
 - (4) ラサル派
 - (5) 破産

結 語

問題の設定

1860/70年代における「プロレタリア的民主主義のブルジョア的民主主義からの分離」(G.マイヤー)は、近代ドイツ史上の一分水嶺を成す。それまで自由主義の民主主義翼と密接に結びついていた労働者運動はいまやこれと分離し、自由主義と社会民主主義は以後それぞれ別個の道を歩むことになった。このうち自由主義は大衆的基盤を十分に確保しえず、保守ドイツの陰にうずもれていく。これにかわって社会民主主義が「かつてのブルジョア的急進主義の事業の継承者」(E.ベルンシュタイン)となり、やがて巨大な組織力を有する一大勢力に発展した。もっとも帝政ドイツの階級社会のなかで社会民主主義はつねにアウトサイダーにとどまり、「祖国なき輩」としての差別待遇を強いられた。1919年の「ヴァイマル連合」は、社会民主主義—自由主義—民主主義の政党連立による政権をドイツで初めて実現したが、しかしそれも短命に終わる¹⁾。

このような意味を持つドイツ史上の「分水嶺」のなかで、一般の労働者はどのような行動をとったのだろうか。一個の事例を通じてこの点を検討することが本稿の課題である。事例にとりあげるのはザクセン最大の工業都市ケムニッツの労働者運動であり、とくにこの都市の機械工業労働者によって設立された生産協同組合が考察の中心におかれる。シュルツェとラサールの論戦によって上の「分離」の過程の焦点の一つを成した生産協同組合の問題は、労働者の実践のレベルではどのように展開したのだろうか。

すでにわれわれは、ケムニッツの機械工業労働者の経済的・社会的状態についての分析を行っている²⁾。以下では彼らを取りまく政治的環境、そして彼ら自身の積み重ねてきた運動・政治的経験の検討がなされるであろう。そしてこれを踏まえてケムニッツ機械製造工による生産協同組合の分析が行われる。ただしこれらの検討においてわれわれは、ケムニッツのみに視野を限らず、むしろドイツ全体の状況のうちにケムニッツの経験を位置づけることに努めたい。こ

れによって「事例」の「事例」としての限界を、幾分なりとも克服しうるであろう。

- 1) Vgl. J. Kocka, Die Trennung von bürgerlicher und proletarischer Demokratie im europäischen Vergleich, in : Ders. (Hg.), Europäische Arbeiterbewegungen im 19. Jahrhundert, Göttingen 1983, S. 5 f. ; H.-U. Wehler, Nachwort, in : G. Mayer, Radikalismus, Sozialismus und bürgerliche Demokratie, Frankfurt a. M. 1969, S. 193 ; H.-U. ヴェーラー『ドイツ帝国 1871—1918年』（大野英二・肥前栄一訳）未来社, 1983年, 133-137頁.
- 2) 拙稿「産業革命期におけるケムニッツ機械工業の発展と労働者の状態」『立命館経済学』39-5（1990）。本稿はこの論文の続編を成す。

I. 革命後の労働者運動と地域的特質—概観—

1. 革命後の労働者組織

1848/49年の革命から1860年代における労働者運動の復活の時期にかけて、労働者の運動がどのような状態にあったか。まずドイツ全体について概観しておこう。

この時期、ドイツにおける最も代表的な労働者の組織形態は、各地の労働者協会ないし労働者教育協会（Arbeiterverein, -bildungsverein, -fortbildungsverein, 以下たんに労働者協会とよぶ¹⁾）である。オッファーマンの調査によれば、1848年から1850/52年の時期にドイツ全体で335地区に労働者協会が存在し、また1860—64年には218地区に225の労働者協会が存在した²⁾。後者のうち1840年代ないし革命期から存続するものは16ないし19にすぎず、大半（175ないし178）の労働者協会は1860年代に入ってから設立されたものである³⁾。

革命期の労働者協会は、革命の敗北によって一旦ほぼ壊滅状態に陥った。労働者の組織活動が再び活性化するのは1850年代の末、ドイツ諸邦で自由主義的な政策転換が行われる「新時代」の到来以降のことである。労働者運動にとっては、特に結社法・出版法の執行がゆるやかになったことが重要な意味をもつ

た。とりわけ1862年から64年は労働者協会設立のブームにあたり、上の225の労働者協会のうち1862年には31ないし33、63年には71ないし72、64年には44が設立されている。⁴⁾

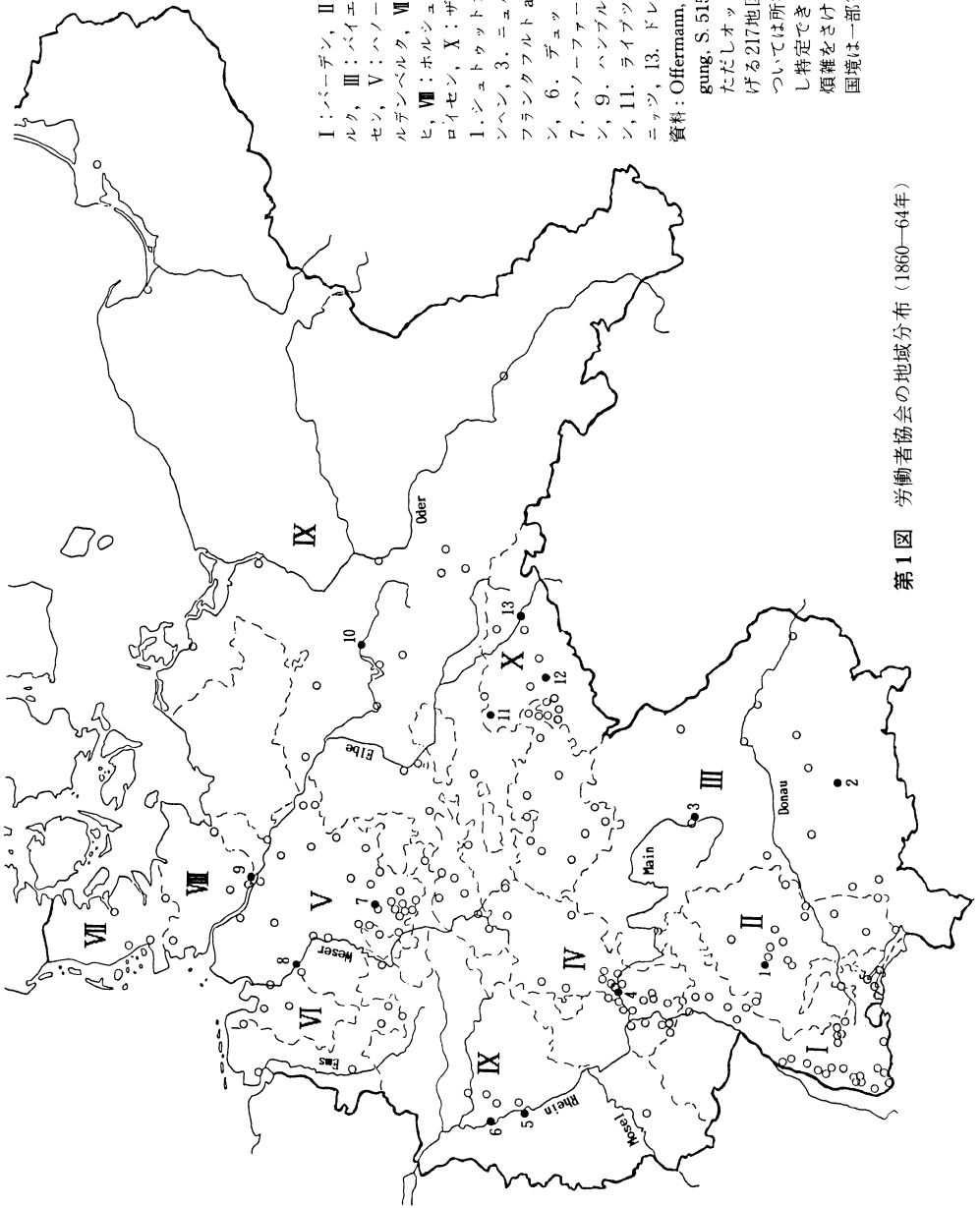
ただし革命期と1860年代の労働者運動が全く断絶していたわけではない。若干とはいえ革命期以来の組織が存在することは上に指摘した。さらに1860—64年に労働者協会の存在した218地区の半数近く（99=45.4%）では、すでに革命期に先行者が存在している。また両時期を通じて同じ活動家の名前が組織の指導者として現れる例も、多数確認されている。二つの時期をむすぶ連続性について、われわれは後にさらに言及するであろう。⁵⁾

さて1860—64年における労働者協会所在地の分布を示せば、第1図のようである。最も多くの労働者協会を擁したのはプロイセン（42地区）であり、ハノーファー（39）、バーデン（36）がこれに次ぐ。それ以外ではヘッセン（29）、バイエルン（16）、ヴュルテンベルク（15）、ザクセン（14）、テューリンゲン諸邦（11）、シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン（9）、オルデンブルク（5）、ハンザ諸都市（2）となっている。⁶⁾以下これらのいくつかについて、それぞれの地域的特質に留意しつつ、三月革命期以来の労働者運動の展開を追うことにしよう。⁷⁾

2. 各地の労働者運動

(1) 西南ドイツ

ヴュルテンベルク・バーデンという西南ドイツの二つの邦については、自由主義・民主主義的名望家層との密接な協力関係、労働者運動の改良主義的性格がしばしば指摘されている。例えばD. ドーヴェは、「自由民主主義的な特徴をもち、自由主義的・民主主義的な市民層と共同する労働者運動の牙城」とヴュルテンベルクを特徴づける。⁸⁾ 実際革命期のヴュルテンベルクでは、人民党（Volkspartei）と労働者友愛会との間にいわば「政治的民主主義」と「社会的民主主義」との分業関係が成立しており、F. バルザーによれば、「労働者の状態の社会経済的改良と、そして同時に労働者の『倫理的・道徳的教育』が、ヴュ



I：バーデン，II：ヴュルテンベルク，III：バイエルン，IV：ヘッセン，V：ハノーファー，VI：オーストリア，VII：シュレスヴィヒ，VIII：ホルシュタイン，IX：プロシヤ，X：ザクセン

1. シュトゥットガルト，2. ミュンヘン，3. ニュルンベルク，4. フランクフルト a.M.，5. ケルン，6. デュッセルドルフ，7. ハノーファー，8. ブレーメン，9. ハンブルク，10. ベルリン，11. ライプツィヒ，12. ケムニッツ，13. ドレスデン

資料：Offermann, Arbeiterbewegung, S. 515 ff. より作成。
 ただしオッファーマンのあげた217地区のうち，21については所在地を確認できなかつた。また，重複をさけるため，各邦の国境は一部省略してある。

第1図 労働者協会の地域分布（1860—64年）

ルテンベルクにおける労働者友愛会⁹⁾の最も重要な目的となった」。

1862年以降、ヴュルテンベルクでも労働者協会が多数結成されるが、この際も自由主義者・民主主義者との結合は維持された。シュルツェ=デリッチュの自由主義的協同組合運動は、ここで広汎な共鳴を得ている。一方1869年にいたるまで、ラサール派の労働者協会はヴュルテンベルクに一つも存在しなかった。またアイゼナハ派=SDAP（「社会民主労働者党」）は1870年代初めによりやくこの地に地歩を得たが、その結果ヴュルテンベルクの「改良主義的」伝統が党内に持ち込まれることになる。

バーデンでは1849年5月の蜂起によって、革命下のドイツで誰一の共和制政府が成立した。流血の事態にいたることなく革命が終息したヴュルテンベルクと異なり、ここでは反動と革命との軍事的衝突が革命の幕を閉じた。同年7月の革命政府の倒壊は、バーデンのみならずドイツ三月革命全体の最終的な敗北を告げるものである。

革命期のバーデンの労働者協会については、これに関する資料が組織自体とともに1849年春の闘争の犠牲となったため、ほとんど不明である。この頃からドイツ各地で支配的になる共済金庫を拠点とする労働者の活動も、当局の徹底的な弾圧のためにバーデンでは展開しえなかった。にもかかわらず、革命期に労働者組織の存在した地区の半数以上で、1860年代に再び労働者協会が成立している（10のうち6）。

少なくとも1860年代のバーデンは、ヴュルテンベルク同様自由主義的な労働者協会運動の典型的な地域であった。この時期に多数成立した労働者教育協会は、ほとんど例外なく自由主義的名望家・知識人層のイニシアティブによるものである。バーデンでは1850年代後半に、プロテスタントおよびカトリックの職人協会が多数成立しており、これを切り崩すことが労働者協会設立の一つの目的であった。多くの労働者協会は、機会あるごとに「自由主義的」なバーデン大公家への信頼を表明している。シュルツェの協同組合運動はここでも成功を収めた。一方社会主義的労働者運動は、1860年代末にいたっても労働者協会を組織上の拠点とすることができなかった。

以上のような西南ドイツの労働者運動の「改良主義的」性格の背景として、この地域における工業発展の後進性、それに応じた階級分化・階級対立の未成熟をわれわれは指摘しうるだろう。繊維・金属工業を主要部門とするこの地域の工業は、いくつかの中心地を持ちつつも広く分散していた。都市および農村に散在する工業で働く労働者のほとんどは、小地片を持つ「労働者農夫」であり、彼らの経済的地位は小農・小手工業者と大差ない¹⁰⁾。社会主義的、あるいは階級としての労働者の運動に応じる心理的基盤は、彼らの間にほとんど存在しなかったのである。

(2) バイエルン

南ドイツのもう一つの邦バイエルンでも、状況は基本的に同様である。三月革命期にバイエルンの労働者は、労働者協会が政治に関わらぬよう初めから心がけていた。もっとも組織自体とは別に、労働者は政治的には民主主義者と密接に協力している。労働者組織の弾圧は、バイエルンではほぼ完全に成功した。共済金庫・社交団体の形で労働者協会の活動を部分的に継続しようとするいくつかの試みも、遅くとも1853年末には消え去った。

1861/62年以降、左翼自由主義および民主主義の名望家・知識人層の指導下でバイエルン各地に労働者協会が成立した。労働者協会のメンバーは、とりわけ南ドイツでは手工業職人・小親方が圧倒的であり、不熟練の工場労働者はわずかにすぎない。他の多くのドイツ諸邦同様、バイエルンでも労働者協会に先立って体操・射撃協会の運動が展開していた。ただし、例えば後述するヘッセンのマイニングウで見られるような両者のあいだの直接の組織的・人的な結びつきは、ここでは知られていない。バイエルンの労働者のあいだでは、とくに営業の自由の導入が中心的な要求となっていた。バイエルンではなお結婚に厳格な法的規制がなされており、営業の自由の実現は経済的独立のみならず、さらにこれを条件とする結婚をも可能にするはずであった。1862年4月の営業令によっても、バイエルンではツンフト的営業規制がなお完全には廃棄されなかった。この結果、営業の自由の要求において、進歩的な手工業親方・企業家と労

働者の利害が一致し、これが階級間の緊張を和らげることになる。労働者は革命期以来、議会に対する請願という「議会主義的」な方法を要求実現の手段として好んでとった。

バイエルン進歩党左翼との関係に基づくニュルンベルク・ランズフート・ミュンヘンの政治的傾向を別にすれば、バイエルンの労働者協会は一般にあらゆる政治活動から遠ざかっていた。1862年11月にニュルンベルクで開かれたバイエルン労働者会議は、ベルリン・ライプツィヒを中心とする北ドイツの「会議運動」—これについては後に述べる—に対抗するものとして企図された。後者が労働者独自の運動の実現をめざし、また政治活動への関与をも視野に入れていたのに対し、前者は自由主義者と共同しつつ、社会・経済問題に集中しようとした。「教育は自由にする」というバイエルン労働者会議の決議の一句は、労働者教育協会の自由主義的イデオロギーをそのまま表現するものである。ニュルンベルク・フルト、そしてプファルツ地方を例外として、社会主義的労働者運動はバイエルンでは労働者協会に拠点をもつことができなかった。

(3) ヘッセン

中部ドイツのヘッセンでは、ライン＝マイン地方（マインガウ）を中心に活発な労働者運動が展開した。特にフランクフルト周辺では、すでに三月革命以前から急進民主主義的、社会主義・共産主義的アジテーションが労働者のあいだで展開されていた。ラインラント・ハノーファーと並んで、ライン＝マイン地方は「共産主義者同盟」が労働者協会に強い影響力をもったもう一つの地域である。革命期の労働者協会は政治的な色彩を強く帯び、民主主義者の諸団体と密接な関係をもった。

革命期に労働者協会が存在したマインガウの6つの都市—これらはすべて「労働者友愛会」に加わっていた—のすべてにおいて、1860年以降再び労働者協会が成立した。また革命期に活躍した小ブル急進民主主義者は、1860年代の労働者運動においてもふたたび主導的な役割をはたした。彼らの周囲に結集したフランクフルトの急進的な手工業職人層は、体操協会・合唱協会等の諸団体

を通じて反動期にも活動を続けていた。革命後の反動期には市参事会が労働者協会の弾圧を行ったが、自由な帝国都市フランクフルトは、民主主義者の地下活動にとってほとんど理想的な場所となっていた。さらに中小諸邦の集合体であるヘッセンでは戦術的中心地の移動が容易であり、各邦の境を越えて彼らの運動を取り締まるべき中央権力は存在しなかった。

こうして1860年代の労働者運動においても、フランクフルトはその中心地の一つとなった。ただしフランクフルトの急進民主主義グループが、この地方の労働者運動全体を支配しえたわけではない。1862年4月、プロイセン主導下のドイツ統一を唱道する自由主義者の組織、国民協会（Nationalverein）は、ロンドンの万国博覧会に12人の労働者を派遣することを決定し、そのための募金を訴えるアピールを全国に発した。このアピールをめぐる各地で労働者の集会が開かれ、まもなく全ドイツ労働者会議の開催が議論の焦点となった。1862年5月にフランクフルトで開かれたマインガウ地方の労働者会議は、このいわゆる「会議運動」の端緒に属する。ここでは国民協会の募金活動を全ドイツ的な行動とすることが確認された。しかし集会を召集したフランクフルト労働者協会自身は、国民協会の親プロイセン的傾向に対する反感から、また自由主義的名望家層によって労働者独自の運動がからめとられることを嫌って、募金活動に参加しないことを決議した。

さらにフランクフルト市内においてさえ、労働者教育協会の会長シュヴァイツァー（J. B. v. Schweitzer）一後のADAV（「全ドイツ労働者協会」）党首一らを中心とする急進派は実は少数派にとどまっていた。協会の反資本主義的・社会主義的傾向が明確になるにつれ、その成員数は急速に減少する。1862年8月のシュヴァイツァーの逮捕とともに、フランクフルトの急進的指導者はマインガウの労働者運動から離れ、ゾンネマン（L. Sonnemann）ら¹¹⁾穏健民主主義者がこの地方の運動を完全に掌握した。彼らは教育を目的とする労働者教育協会の形に労働者運動を限定し、独立した政治運動にそれが発展することを阻止しようとした。

(4) 北ドイツ

ハノーファー、オルデンベルク、シュレスヴィヒ=ホルシュタインという北ドイツの三つの地域では、労働者協会は一般に政治活動から離れ、教育および共済活動に専念した。西南ドイツに比べればやや政治的性格が強いとしても、それは程度の問題でしかない。これらの地域は工業化の進展が遅く、1860年代にいたってもなお農業的な性格が支配的であった。この結果尖鋭な階級対立の欠如していたことが、労働者組織の穏健な性格の背景を成すと言えるだろう。以下ハノーファーを中心にこの地域の労働者運動の展開過程を追うことにしよう。

1849年10月に「北ドイツ労働者連合」が結成されると、北ドイツのほとんどの労働者協会がこれに加入した。「ドイツ労働者友愛会」中央委員会の支援を意図して結成されたこの地域連合の内部では、1851年初め以降、特にハノーファー（市）労働者協会に結集する共産主義者・社会主義者が影響力を強めた。ただし国全体として見れば、農業的なハノーファー王国において、彼らは結局確たる地歩を占めずに終わる。むしろ当局の規制のもとで、労働者組織はすべての政治活動から完全に離れていった。この結果、また比較的ゆるやかな結社法にもよって、ハノーファーの多くの労働者協会は反動期を生き延びることができた。1856—64年に存在した40の労働者協会の4分の1が、すでに1850年までに結成されたものである。また1860—64年に労働者協会の存在した地区の53.8%が革命期に先行者を持ち、「ドイツ労働者友愛会」に属する組織に限ってみれば、その比率は4分の3に達する。

すでに指摘したように、1860年代にいたってもハノーファーはなお圧倒的に農業的な地域であった。雇用労働者10人をこえる「工場」は少数にすぎず、繊維工業においてさえ機械の導入はわずかであった。非農業労働者の70%を占める手工業は、営業の自由・移動の自由の制限を伴う保守的な農業・営業政策のもとでハノーファー外部からの影響をほとんど受けず、また国内の工業との競争もわずかの地域で見られるにすぎなかった。このような手工業的・中小経営的な営業構造が、ハノーファーにおける労働者協会の性格をも規定する。組織の成員の大半は、遍歴の途上工場・手工業経営で仕事について手工業職人であ

った。革命後の穏健な伝統、階級対立の尖鋭化の欠如のもとで、これら協会成員の関心は、遍歴援助等の共済活動と個人の社会的上昇のための教育活動、そして法律上はすでに存在する国民としての同権の促進に限られた。

ハノーファー王国の労働者協会に特徴的なのは、自由主義者による政治的・経済的解放運動との組織上・イデオロギー上のつながりが弱いことである。親方・企業家層の労働者協会への参加はわずかにすぎない。そもそもハノーファーにおいて、ブルジョアジーの経済的地位はなおきわめて弱かった。また保守的性格の強いこの国で、労働者協会の政治的性格に対する不信が消え去ることはなかった。こうしてハノーファーの労働者協会は一般的な民衆教育の問題に集中し、1862年以後も政治的な労働者運動から距離をおくことになる。

オルデンベルク、シュレスヴィヒ=ホルシュタインは中農を基礎とする農業地域で、農業の優位はさらに明確である。ただし後者では、不安定な生活を強いられた小作農による運動（インスト運動）も見られた。労働者協会に結集したのはここでも手工業職人ならびに小親方層であり、彼らは非政治的な教育活動に専念した。1865年以降シュレスヴィヒ=ホルシュタインはラサール派の拠点の一つとなるが、これは労働者協会外部の現象である。1860年代にドイツの労働者運動がブルジョア民主主義者からの離脱を決定的にして行く過程で、一般にこれら北ドイツ地域の労働者協会は逆に脱政治化を強め、労働者運動自体から離れていった。

(5) プロイセン

ドイツの東西に大きくのびるプロイセンについて、その全体を統一的に特徴づけるような労働者運動の地域的特質は存在しない。純粋に政治的な労働者協会から職業教育のみを目的とする手工業者協会まで、労働者組織の性格はきわめて多様である。邦全体を包括する労働者組織の連合体や労働者会議は、三月革命期にも1860年代にもここでは成立しなかった。

もっともザクセン王国と並んでドイツにおける工業発展の最先進地域であったラインラントについては、労働者運動の急進的・政治的性格がしばしば指摘

されている。三月革命期にプロイセンに存在した64の労働者協会のうち、37（57.8%）がライン州に集中していた。当時ドイツ最大のケルン労働者協会が、「共産主義者同盟」のドイツにおける最大の拠点であったことはよく知られている。ゾーリンゲン、エルバーフェルト・バルメン、デュッセルドルフの「同盟」支部は「同盟」自体の解散後も地下活動を続け、反動期を生き延びた。1863年にラサールがADAVの設立にのりだしたとき、かつての「同盟」成員ならびにその支持者が彼の主張を支持した。こうして1860年代にラインラントは、ブルジョア自由主義者と初めから敵対したADAVの牙城となる¹²⁾。

ただし邦全体として見れば、1870/71年の普仏戦争まで、プロイセンでは自由主義諸政党、特に進歩党の影響が強かった。ようやく1870年代に入ってベルリンで社会民主主義者が地歩を得ることに成功したものの、とくに東部諸州では自由主義的な諸団体が労働者協会に決定的な影響を及ぼしていた¹³⁾。

首都ベルリンについては、1860年代初めの「会議運動」との関連で立ち入って論じておく必要がある。この時期ベルリンの労働者運動を率いたのは、車両工場の塗装工アイヒラー（C. Eichler）である。先にふれた国民協会によるロンドンへの労働者派遣プランによって彼はイギリスに渡り、とくにロッチデールの織布工協同組合を訪ねて強い感銘を受けている。ベルリンに戻った彼は、イギリス的・非政治的な労働者運動、ただし自由主義的名望家層からは独立した労働者運動を組織しようとした。営業の自由と移動の自由、協同組合および廃疾金庫の設立、そしてこれらの目的を実現するための最も有効な手段としての全ドイツ労働者会議の開催。1862年8月以降開かれたいくつかの労働者集会でアイヒラーはこのようなプログラムを示し、ベルリンの労働者の支持を得た。全ドイツ労働者会議は同年11月にライプツィヒで開催されることとなり、その準備のために、アイヒラーを委員長とする中央委員会がベルリンに設置された。こうしてベルリンは会議運動の中心となったのである。

アイヒラーの功績は、かつて三月革命期にとられた公開労働者集会という組織手段をドイツの労働者のうちに甦らせたことにある。先に見たマインガウの運動が地域内にとどまったのに対し、ベルリンの提起にはライプツィヒ・シュ

トゥットガルトなど各地の労働者が続いた。1862年夏以降、ドイツ各地で公開労働者集会が開催される。われわれはこのような運動の背後に、労働者（教育）協会という組織形態に対する労働者の不満のあったことを知っておかねばならない。

労働者協会には、労働者のみならず、小ブル・インテリ層、さらには企業家も加わっていた。むしろ1860年代に成立した労働者協会のほとんどすべては、これら自由主義的名望家層のイニシアティブによって成立したと言ってよい。彼らは労働者を、教育によってやがて「市民」に上昇すべき存在と考え、いわば「第四身分」の存在を否定した。これら労働者協会の連合体 VDAV の第一回大会（1863年）で、ある代議員は、「独立の市民（Staatsbürger）」となることが目的であり、他の諸身分から分離した「労働者身分」を維持したり形成したりしてはならない、と述べている¹⁴⁾。これに対して会議運動の推進者たちは、すべての労働者が参加しうる公開労働者集会こそが労働者に真の意見表明の可能性を与える、と考えた。労働者協会がいわば労働者貴族の形成を促進するのに対し、労働者集会で選出された代表から成る労働者会議こそが労働者身分全体を代表しうる。「労働者集会が階級意識を促進したのに対し、労働者協会はしばしばこれをもみ消した」（ナアマン）のである¹⁵⁾。もっともわれわれは、この労働者協会、あるいはその連合体が、やがて労働者の階級組織に発展する可能性をも見逃してはならないだろう。

これに対して自由主義者の名望家層は当然ながら労働者会議に反対し、あるいは各地の労働者協会の代表者会議という形でのみその開催を認めようとした。とくに1862年秋にはいわゆる憲法紛争が決定的な局面を迎えており、左翼自由主義者の組織であるドイツ進歩党は、保守派に対抗する進歩的勢力の隊列を乱すものとして労働者の運動の独立を阻止しようとした¹⁶⁾。

もとよりこのような反対によって労働者の運動が止んだわけではない。ただしアイヒラー個人について言えば、ビスマルク政府のスパイであるとの嫌疑がかけられ—実際遅くとも1862年12月以降、彼は警察のスパイとして働いた—、同年秋に運動から脱落した¹⁷⁾。1862年11月、2,000人が参加したベルリンの労働

者集会は、労働者会議の開催を翌年に延期し、また会議の準備を開催地であるザクセンのライプツィヒに委ねることを決定した。これによって会議運動の中心は、ベルリンからライプツィヒに移ることになったのである。

(6) ザクセン

革命期においても1860年代においても、ザクセンはドイツにおける労働者運動の中心地の一つであった。1848年から1850年にかけては「全ドイツ労働者友愛会」の中央委員会が、また1862/63年にはドイツ労働者会議召集のための中央委員会が、いずれもライプツィヒにおかれている。もっともこの二つの時期の間に、直接の組織上の連続性は存在しない。1860—64年に存在した労働者協会14は、すべて1860年に入ってから結成されたものである。革命期の労働者組織は、他の諸邦同様1853年までには解体された。体操・合唱協会も厳格な監視下におかれ、労働者がこれに加わる可能性はほとんど閉ざされていた。政治的色彩をもつ組織に加わる可能性を労働者に一定程度与えたのは、既存の宗派に対抗して現れた自由信仰団体である。プロテスタントの運動が当局の弾圧下でほとんど解体したのに対し、特にザクセンのドイツ＝カトリック運動は反動期を生き延び、これに加わる労働者に民主主義の精神を伝えた。ライプツィヒにおける会議運動の指導者のなかには、ここで活躍した労働者が見られる¹⁸⁾。

1863年以降、ラサール派およびベーベル指導下のVDAVの活発な活動により、ザクセンには多数の労働者協会が成立した。ただしこれら労働者協会の大半はVDAVの傘下に入り、ADAVはザクセンでは少数派にすぎなかった。一般にVDAVはライン河以南およびザクセンに拠点を持ち、ADAVは特にプロイセンで組織上の成功を収めている¹⁹⁾。政治的には、ザクセンの労働者協会の多くは初めから自由・民主主義的国民統一運動の左翼の立場をとっていた。民主主義者の指導下で労働者協会は政治的色彩を強め、進歩党と対立して普通選挙権の導入を求めた。ただし後に検討するケムニッツの労働者協会は、1868年にVDAVが左右に分裂したとき、右派少数派に従ってVDAVを脱退している。一方ADAVは、未組織の労働者および若干の労働者協会内部の反対派

の間で支持を得た。ザクセンの労働者運動は、ドイツで最も良く組織されたものとなった。

1862年11月、先に見たベルリン労働者集会の決定を受けて、全ドイツ労働者会議召集のための中央委員会がライプツィヒに設置された。ライプツィヒの労働者、特に中央委員会内部の急進的な多数派は、政治的にはブルジョア的解放運動の最左翼に労働者運動は立つべきだと考えていた。この立場から、労働者に選挙権を認めようとしない進歩党の態度が批判された。またシュルツェ＝デリッチュの協同組合も、労働者には無益なものと考えられた。「自助は普通選挙権を通してのみ可能である。」中央委員会の委員長フェールタイヒ（J. Vahlteich）はこう述べている。憲法紛争の緊迫した情勢のもとで、反動に対して進歩党と共同する必要自体は認められていたものの、ベルリンとは異なり、政治的に独立した労働者運動への道がこうして踏み出されたのである。

もっとも全体として見れば、ザクセンの内外を問わず会議運動に対する自由主義者の干渉は効をおさめ、ライプツィヒ中央委員会は労働者内部で孤立していった。会議運動の意義・目的は、労働者間で十分に理解されなかった。自由主義系の諸新聞は、労働者会議に代表を派遣せぬよう、むしろ各地で労働者協会を設立するようくりかえし呼びかけた。特に南・西南ドイツでは、遅くとも1863年2月末までに当初の会議のプランは挫折し、労働者協会代表による労働者会議を開くための予備会議の開催のみが議論の対象となっていた。結局中央委員会は全ドイツ労働者会議の計画を放棄し、この間急速に接近したラサールの影響のもとで、全ドイツ的な労働者政党の結成をあらためて提起する。こうして1863年5月にADAVが、またこれに対抗して同年6月、自由主義・民主主義的名望家層の主導下にVDAVが結成されたのである。

以上われわれは革命後の各地の労働者運動の展開を追い、特に1860年代初めにおける労働者運動成立の過程を簡単に描いた。ここでドイツ全体の状況をまとめて見れば、ヴュルテンベルク、バーデン、ハノーファーのように政治活動から離れた労働者組織の支配的な地域が、1860年代には優位を占めた。階級運

動としての労働者の組織活動を全ドイツの規模で展開しようというライブツィヒ中央委員会のもくろみは、労働者大衆の意識状態を顧慮した場合、幻想的であったとさえ言える。政治行動を含む独立した労働者運動が第一歩を踏み出したことは確かであるにせよ、全体のなかで見ればそれはなお労働者のわずかな部分をとらえたにすぎなかった。

そもそも労働者組織に加わった労働者自体が、全体の小部分を成すにすぎない。1863年の VDAV 第一回大会に代表を送った各地の組織の成員数はあわせて17,580人、ADAV の成員数は1864年9月の時点で3,500人であった。またラサール派とアイゼナハ派のいわゆるゴータ合同の時点で、新党 SAPD（「ドイツ社会主義労働者党」）の成員数は24,443人である。1860/70年代におけるドイツの労働者数について信頼しうる数値は存在しないので、とりあえず後の全国統計によって1882年の数値を見れば、工鉱業・建設業（手工業を含む）のみで賃労働者は約450万人を数えている（農業部門への社会民主党の進出は1890年代以降のことである²⁰⁾）。労働者運動は、いわば未組織の労働者という大海に浮かぶ小島にすぎなかった。もっとも上に見た「プロレタリア的民主主義のブルジョア的民主主義からの分離」が、この時期にすでに不可逆的現象となっていたこと、また以後労働者運動がドイツにおける民主主義の中心的勢力となったという事実の重要性を、われわれは忘れてはならない。

それでは以上検討したような全体の状況のなかで、ケムニッツにおける革命後の労働者運動はどのように展開したのであろうか。

- 1) 1863年の VDAV（「ドイツ労働者協会連盟」）第一回大会で、労働者教育協会等の名称を労働者協会に統一するとの決議がなされている。Berichte über die Verhandlungen der Vereinstage deutscher Arbeitervereine (=Berichte der VDAV), ND hrsg. von D. Dowe, Berlin/Bonn 1980, S. 39.
- 2) T. Offermann, Die regionale Ausbreitung der frühen deutschen Arbeiterbewegung 1848/49-1860/64, in : Geschichte und Gesellschaft (=GG) 13 (1987), S. 427 f.
- 3) T. Offermann, Arbeiterbewegung und liberales Bürgertum in Deutschland 1850-1863, Bonn 1979, S. 515 ff. (Anlage I) より計算。なお労働者協会と同様の

活動を行い、あるいは労働者協会の地域連合形成の動きに加わった手工業者協会・職人協会などの組織も、上の数に含まれている。また設立年は推定を含む。「16ないし19」など、われわれのあげる数値に一定の幅があるのは、設立年を一つに特定しえない場合があることによる。

- 4) Ebd.
- 5) Offermann, *Ausbreitung*, S. 428. 「連続性」の問題について, Offermann, *Arbeiterbewegung*, S. 13-15, 35-39 を参照。
- 6) 三月革命期の労働者協会の地域分布については、拙稿「ドイツ三月革命期の労働者運動における〈アツツィアツィオン〉」『土地制度史学』123 (1989), 6頁(第1表), および F. Balsler, *Sozial-Demokratie 1848/49-1863. Die erste deutsche Arbeiterorganisation "Allgemeine deutsche Arbeiterverbrüderung" nach der Revolution*, Bd. 2, Stuttgart 1965², 表紙見開きの地図を参照。
- 7) 以下特に注記のない限り, Offermann, *Ausbreitung*, S. 431 ff.; Ders. *Arbeiterbewegung*, S. 82 ff., 295 ff., 345-449 による。さらに K. Birker, *Die deutschen Arbeiterbildungsvereine 1840-1870*, Berlin 1973, Kap. 2 をも参照。
- 8) D. Dowe, *Deutschland: Das Rheinland und Württemberg im Vergleich*, in: Kocka (Hg.), S. 88.
- 9) Balsler, Bd. 1, S. 339 f.
- 10) 藤田幸一郎『近代ドイツ農村社会経済史』未来社, 1984年, 289頁。
- 11) オッファーマンによれば, 当時の自由主義者・民主主義者は, およそ以下の5つのグループに区分しうる。

1. 立憲自由主義者。彼らは国家の行動を法秩序の枠内に規制することを主張する。邦議会による法律の承認, 租税承認権, 陪審裁判制, 地方自治等が彼らの要求である。ただし彼らは狭義の「議会政治」には反対し, 憲法上の制約を加えた上で国王の拒否権を認めていた。

2. 議会制自由主義者。彼らはフランス啓蒙主義の理念に立ち, 個々人の結合によって成立する国家は, 個人の権利の保証にのみその機能を限られるべきだと考えた。彼らのめざす「議会制的」君主制において, 君主はフランス的な「市民の王」たるべきであった。ただし一種のエリート意識, 大衆に対する不信から, 彼らは財産評価に基づく等級別選挙制を求めた。経済問題ではマンチェスター派自由貿易論に立ち, 政治的にはプロイセン主導下のドイツ統一を唱道して, 国民協会および各邦の進歩党のメンバーの中核を成した。

3. 左翼自由主義者。彼らは, 議会制自由主義者とともにいわゆる進歩自由主義の一角を成す。ただし彼らは普通選挙権の導入を求め, 労働者・大衆の問題, その組織化に積極的にとりくんだ。しかし徹底した民主主義者と異なり, 例えば

プロイセンの左翼自由主義者は欽定憲法を支持し、共和制理念から離れている。またほとんどの民主主義者と異なって、彼らは議会制自由主義者と同様中間身分イデオロギーの擁護者であり、市民の中間層に文化・政治上の中心的な機能を託した。彼らはドイツ進歩党（プロイセン）の左翼を成す。シュルツェ＝デリッチェはこの派の代表的人物の一人である。

4. 穏健民主主義者。彼らは特に西南ドイツの中規模諸邦に多く見られる。彼らのほとんどは三月革命のかつての闘士である。原則として国民権と共和制のモデルを志向したが、ただし革命という手段はあくまで最後の可能性としてのみ考慮された。彼らは労働者を自由と統一のための闘いの重要な同志と位置づけはしたものの、しかし同権のパートナーとは見なさず、労働者が独自の運動を展開することには反対した。政治的には、彼らは各邦の進歩党を支持している。

5. 革命的民主主義者。彼らは手工業者・労働者・小ブル層のなかにわずかの支持者を持つだけの比較的小規模なグループである。穏健民主主義者と異なり、ドイツの民主主義的改革・統一のために意識的に革命という手段を用いようとした。彼らはさらに二派に分かれる。一方は国民協会左翼の急進的部分を成し、自由主義者・穏健民主主義者と協調した。この派と鋭く対立して若干の「職業革命家」が存在する。彼らのほとんどは、ジャーナリズムの世界で不定期の仕事を得て暮らしていた。反動的な諸政府と並んで、資本・ブルジョアジーが彼らの主要な敵である。1862/63年以降展開した労働者運動のうちに、彼らは革命のための大衆の基盤を見た。W. リープクネヒト、F. ラサールはこの派の民主主義者に数えられる。

以上の区分はただし一応の目安にすぎず、個々の人物ないしグループを上でのシェーマに従ってすべて分類し切れるわけではない。Offermann, Arbeiterbewegung, S. 30-34.

- 12) Vgl. Dowe, S. 89 ff. ただし ADAV が勢力を伸ばしたのは主としてプロテスタントの地域であり、ライン州でもカトリックの地域ではしばしば助任司祭層が労働者の運動を指導した。ライン州全体ではカトリックの人口が多数を占めるが、ただし労働者組織の拠点となる都市および工業地帯では、一般にプロテスタント住民の比率が高かった。また1860年代にライン州の労働者協会がプロイセン全体のうちに占める比重は、革命期とくらべて大幅に低下している（42のうち7 = 16.6%）。
- 13) Birker, S. 90 f.
- 14) Berichte der VDAV, S. 9.
- 15) S. Na'aman, Lassalle, Hannover 1970, S. 546.
- 16) 憲法紛争について、望田幸男『近代ドイツの政治構造』ミネルヴァ書房、1972

- 年；松本彰「プロイセン憲法紛争の終結」『歴史学研究』445（1977）を参照。
- 17) Vgl. S. Na'aman, *Der Fall Eichler. Zur Frühgeschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, in: *International Review of Social History* 15 (1970), S. 347 ff.
- 18) ドイツカトリック運動は、教皇至上主義的に変質したローマカトリックに反対し、ドイツ人をドイツ人独自の仕方でも神のもとに導くことを唱える運動として1840年代半ばに現れた。啓蒙主義的色彩を強く帯び、参加者にはプロテスタントも多く含まれている。反動の拠点であるローマ教会に対抗する運動として、自由主義者・民主主義者はこれに大きな期待を寄せた。1848年の時点で運動は60,000人を包摂したと言われるが、結局セクトの域をこえることはできなかった。T. Nipperdey, *Deutsche Geschichte 1800-1866*, München 1985, S. 412；H.-U. Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd. 2, München 1987, S. 472 ff. プロテスタントの運動については、Nipperdey, S. 435；Wehler, S. 466 ff.
- 19) J. Kocka, *Lohnarbeit und Klassenbildung. Arbeiter und Arbeiterbewegung in Deutschland 1800-1875*, Berlin/Bonn 1983, S. 191. 1871年3月のドイツ帝国議会選挙でラサール派は62,952票を獲得したが、そのうち46,313票がプロイセンのものであった。なかでもラインラント（14,821）、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン（11,182）、ハノーファー（6,805）が多数を占める。他にラサール派が多くの票を得たのはヘッセン（3,973）とハンザ諸都市（ハンブルク5,071、ブレーメン1,506、リュベック543）である。一方アイゼナハ派は38,975票を得たが、うち31,043票をザクセンが占め、バイエルン・ブラウンシュヴァイク・プロイセンがそれぞれ約2,500票となっている。ザクセンにおけるADAVの得票は2,246票にすぎない。F. マーリング『ドイツ社会民主主義史（下）』（足利・平井・林・野村訳）ミネルヴァ書房、1969年、298頁。ADAVの拠点は特にハンブルク、ラインラントのいくつかの都市（バルメン、エルバーフェルト、ゾーリンゲン）、そしてフランクフルトにあり、一方VDAVの拠点はザクセン、テューリンゲン、フランケン（バイエルン）、そしてヴェルテンベルクにあった。北ドイツの労働者協会はVDAVにはほとんど加わっていない。Birker, S. 56, 82.
- 20) Vgl. H. Zwahr, *Die deutsche Arbeiterbewegung im Länder- und Territorienvergleich 1875*, in: *GG* 13 (1987), S. 451.

Ⅱ. ケムニッツの労働者運動

1. 革命後の諸組織と1860年代初めの政治状況

革命後最初の労働者組織としてケムニッツに労働者教育協会が設立されたのは、1862年12月末のことである。この間政府当局は、労働者の組織のみならず、民主主義的色彩をもつすべての運動・組織に徹底的な弾圧を加えていた。1860年代初めの時点で公認の政治組織として存在を許されたのは、政府に忠実な「立憲選挙協会」(Constitutioneller Wahlverein)のみという状況であった。もっとも他の諸邦同様、ザクセンでも1850年代末のいわゆる「新時代」の到来とともに、各種の組織活動が一举に活性化する。労働者教育協会の検討に先立って、われわれはまず、ケムニッツにおける革命後の組織活動全般の状況を簡単に概観しておくことにしよう。¹⁾

まず反動期を生き延びた組織として、われわれは1829年に結成された手工業者協会をあげることができる。日曜学校、技術・営業問題についての集会での議論を通じて、「商工業者のあいだにできるだけ知性を広げること」が協会の目的であった。1840年にその成員は1,000人を数えている。協会の結成はある弁護士の提起によるものであったが、結成集会に参加した14人のうち少なくとも9人が手工業親方であった。また結成から50年の間に協会の役員となった78人の顔触れを見ると、そのうち60人を手工業親方が占めている。手工業者協会は手工業親方層の組織であった。ただし彼らは少なくとも1850年代以降ツンフト強制に反対し、営業の自由の導入を求めている。営業条令の改訂を一つの目的として、ケムニッツの手工業者協会は1857年9月に開かれたザクセン営業協会(Gewerbevereine)会議のイニシアティブをとった。この会議で手工業者協会は、結成を決議された営業協会中央連盟の本部に選出されている。ただし営業自由の問題については、古いツンフト制度の支持者から完全な営業の自由の支持者まで、参加諸団体のあいだで意見が分かれていた。結局中央連盟の規約

はザクセン政府の認可をえられず、翌年再度会議が開かれはしたものの、営業協会結集の試みは失敗に終わった²⁾。

手工業協会の活動で最も大きな成果をおさめたのは、日曜学校（ただし開講は日曜に限らない）である。1847年にここで学んだ徒弟・職人の数は約1,100人、1854年には1,293人に及んだ。受講は無料で、授業内容には読み・書き・計算のみならず、語学・簿記・物理・地理・歴史もが含まれていた。啓蒙主義の伝統に従い、包括的な民衆教育が意図されていたのである。さらに手工業者協会は、安価な住宅を手工業者・労働者に供給するための住宅建設協同組合を1854年に設立し、1854/55年には、非ツunft業種の労働者のための疾病金庫の設立を提案している。

このように手工業者協会は本来非政治的組織ではあったが、しかしそれが自由主義思想を広める一拠点となっていた事実を看過してはならない。1851年に設置された協会の前貸金庫は、革命時のアツツィアツィオン精神の名残と見られて当局の監視下におかれた。とりわけ協会の指導者であった織布親方F. X. レヴィッツァー（Rewitzer）は、要注意人物とされた。すでに1830年代から彼は自由主義者として政治活動に携わり、1845年にはザクセン邦議会議員に選出されている。同じ年、ケムニッツにおけるドイツカトリック組織の創設においても彼は主導的役割をはたした。この組織には、とりわけ政治的不満をもった労働者・小手工業者が加わったが、ただしプロテスタントが住民のほとんどを占めるケムニッツで、それが大衆に大きな影響を及ぼすことはなかった。三月革命が勃発すると、レヴィッツァーはフランクフルト国民議会の代議員に選出された。さらに彼はザクセン下院の議長となるほか、三月政府の設置した営業・労働状態検討委員会の委員長にも選ばれている。また革命後も、1858年9月にゴータで開かれた「ドイツ国民経済会議」に参加し、自由貿易思想のキャンペーンに加わった⁴⁾。これを通じてレヴィッツァーは、国民協会およびプロイセン進歩党との密接な人的関係を築いている。同年の当局のスパイの報告によれば、レヴィッツァーはドイツカトリックの指導者であり、「おそらくシュルツェ=デリッチェと協力し、北・中部ドイツで最も危険な人物」であった⁵⁾。

さて、「新時代」のもとでまず活発な活動を展開したのは、各地の体操・合唱協会である。ケムニッツではすでに革命時に民主主義的な体操協会が結成され、この協会内に合唱協会が併設されていた。体操協会員は武装中隊を組織し、市民軍のエリート部隊としてバリケード戦に参加した。⁶⁾ 1850年代末に存在したケムニッツの体操協会・合唱協会と革命期の組織との間に、何らかの連続性が存在するかどうかは不明である。1859年にドイツ各地で開かれたシラー祭、1861年ベルリンでのドイツ体操祭には、ケムニッツの協会も参加している。これらの祭典は、ドイツ統一を求める革命後最初の大衆行動であった。とりわけシラーの名は、当時ドイツ統一のシンボルとなっていた。シラー祭の開かれた11月9日と10日、労働者は仕事を休んで集会に参加した。参加者の何人かは、後に労働者運動で指導的役割をはたすことになる。⁷⁾

もっとも1860年代の初めには、ドイツ各地のこれらの協会の政治問題への関わりは、なお比較的わずかだったようである。1863年に体操・合唱協会に対する警察の監視が解かれ、政治に対する一般の関心が急速にたかまって初めて、これらの組織が全国的に活動を展開するようになる。

次に1860年代初めから、すでにふれた「ドイツ国民協会」がケムニッツでも活動を始めている。もっともザクセンでは、オーストリアを含む大ドイツの統一を求める声が圧倒的であり、プロイセン主導の小ドイツ的統一を求める国民協会は、ライプツィヒを除けばわずかの支持を得たにすぎなかった。⁸⁾ ケムニッツでも、周辺地域を含めた協会の会員数は1862年の時点で22人にすぎない。とくに最も有力な自由主義者たちが、協会に加わらなかった。先にふれたレヴィツァーは、1863年に次のように述べている。「私はこれまで国民協会に加入しなかった。それを特殊プロイセン的な協会と考えたからである。私はプロイセン人にはなりたくない。」⁹⁾

ただし1863/64年のプロイセン・デンマーク戦争に際して、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン両公国をデンマークが併合すると、これに対する反対運動の先頭にたった国民協会は一挙に声望を高めた。ケムニッツでも、例えば先のレヴィツァーが1863年9月に協会に加入している。ただしその後プロイセンがシ

ュレスヴィヒ併合に走り、また憲法紛争がなおくすぶり続けるという状況のなかで、国民協会はまもなく再び評価を落とした。

最後に労働者独自の組織活動は、革命後どのような状況にあったのだろうか。

全体として見れば、反動期を通じて彼らには政治問題に関与する手段は一切閉ざされていたと言ってよい。おそらく日常の会話のなかでのみ、彼らは自身の要求・期待を表明する機会をもちえたにすぎなかった。社交・合唱・体操協会が、労働者の組織・コミュニケーションの場としてどの程度機能したかは知りえない。

「新時代」の到来、そのもとでの結社法のゆるやかな執行が、ケムニッツの労働者にも組織活動を展開する可能性を与えた。1859年2月に結成された「社交読書協会」(Geselliger Leseverein)の会長は、工場錠前工(機械仕上工)C. ヴィッティヒ(Wittig)である。彼は後にケムニッツ労働者教育協会の会長となり、またいくつもの大規模な労働者集会で指導的役割を演ずる。もっとも読書協会の成員33人の社会的構成は不明であり、従ってこの協会を「労働者の組織」と見なしうるかどうか確言はしえない。ちなみに協会の目的は、「学術書・歴史書を手し、メンバーの間でこれを回覧すること」であった。

1862年10月に結成された「一般読書協会」(Allgemeiner Leseverein) —その目的は啓蒙書・娯楽書を読むことである—の社会的構成については、より正確な情報が得られる。すなわち協会の29人のメンバーの職業は、錠前工(機械仕上工)11人、指物工4人、機械製造工4人、旋盤工3人、工場労働者2人、鍛冶工2人、仕立親方1人、家屋管理人1人、職長1人であった。われわれはこの協会を労働者の組織と見なすことができる。とりわけ金属労働者が多数を占めたことは、本稿の関心からして興味深い。なお協会の会長G. H. テッツナー(Tetzner)も工場錠前工(仕上工)であった。

以上われわれは、三月革命後のケムニッツのさまざまな組織活動を概観した。反動期における当局の追求は確かに徹底的ではあったが、それが労働者の活動の芽を完全につみとったわけではない。とくに「新時代」の到来が、再び活発な組織活動を展開する可能性を彼らに与えた。ケムニッツ労働者教育協会は、

このような前提の上に成立したのである。

2. ケムニッツ労働者教育協会

1862年春以降展開したいわゆる「会議運動」について、われわれはすでにその経過を簡単に述べた。発端となったのはロンドン万国博覧会に労働者を派遣するという1862年4月の国民協会の提案であり、これはケムニッツでも反響を呼んだ。同年7月初め、前述のケムニッツ手工業者協会は同市から労働者を派遣するための募金活動を始め、広く市民の参加を訴えた。しかし集まった資金は162ターラー（Tlr.）にとどまり、これでは2人の労働者の旅費を賄うにすぎなかった。手工業者協会は市参事会に支援を求め、参事会は、協会が提案する労働者の認可を拒否しようという条件を付した上で、200 Tlr.の拠出を約束した。協会の選んだ4人の労働者は参事会の承認を得、まもなくロンドンに旅立った。彼らの職業は、職長（もと機械製造工）、織布工、製本職人、指物職人である。2週間の滞英の後、9月末の帰国報告の中で、職長ハパッハ（F. H. Happach）はドイツの労働者の熟練の低さ、これに由来するケムニッツ機械工業の技術の遅れを指摘し、労働者相互の教育、労働者教育協会の結成によってのみこのような状況を打開できる、と主張した。¹⁰⁾

1862年11月、全ドイツ労働者会議の開催を告げ、これに代表を派遣するよう各地の労働者に訴えるライプツィヒ中央委員会のよびかけが、「ケムニッツ日報」紙に掲載された。ここで中央委員会は、各地に地方委員会を設置し、公開の講演・集会を通じて「祖国における諸事件 [=政治問題への関与!]、および労働者身分に特に関係する諸問題」について世論を喚起するよう訴えている。とくに営業の自由、移動の自由、アソツィアツィオン [=結社?]、老齢・廃疾金庫が、論じられるべき問題としてあげられた。また労働者会議の準備が特定の個人の経済的負担となることのないよう、各地でただちに金庫を設置すること、さらに各地方委員会が中央委員会と連絡を保ち、活動報告を行うことが求められた。¹¹⁾

このよびかけが、ケムニッツ労働者教育協会結成の直接の契機となった。設

立さるべき協会の参考とするため、ケムニッツの労働者は、ライプツィヒの労働者教育協会「前進」(Vorwärtz)の規約を送付するよう中央委員会委員長フェールタイヒに求めた。すでに前年2月、ライプツィヒには「営業教育協会」が結成されていたが、この協会内部の民主主義者が分離して、1862年8月に結成したのが「前進」である。技術・営業・基礎教育のみを行おうとする前者に対して、彼らは労働者の政治教育を重視し、教育協会を一種の政治団体に変えようとした。労働者会議召集のためのライプツィヒ中央委員会のメンバーの大半は、「前進」の指導者層と重なっている。ドイツカトリックの一員であり、当時靴屋を開業してまもないフェールタイヒ(1839年生まれ)、三月革命の闘士であり、その後活発な体操协会会员・ラサール主義者となり、そして1865年に葉巻労働者の全国的労働組合を組織する葉巻労働者フリッツェ(F. W. Fritzsche, 1825年生まれ)¹²⁾などの名を、われわれはあげることができる。

もともと同年12月に発表されたケムニッツ労働者教育協会の規約草案は、政治への関与を厳しく排除している。協会の目的は「労働者身分にとって有益なすべての部門の知識を共同で学び、さらに余暇には、品性正しく・ためになる娯楽を楽しむこと」であり、その際「宗派的・政治的な議論は許されない」。このような規定は、当局による禁止を免れるための必要性によるところが大きい。ただし他方、階級としての労働者の解放より、なお自身の生活の改善に労働者の関心が集中していたことの表れとも言うことができるだろう。¹³⁾ただし労働者の政治的関心については、後にふたたび論じることにする。

1862年12月22日の集会で協会の規約が決議・採択された。規約は同月31日に市参事会の承認を得、これによってケムニッツ労働者教育協会が正式に発足した。翌年1月14日に市参事会に提出された名簿には、169人の協会の氏名が記されている。同年6月のVDAV大会の時点で会員数は300人。1865年夏にはいったん50人ほどに減少し、協会解散の噂さえ流れたが、その後会員数は回復し、1868年には154人を数えている。¹⁴⁾

ところで1863年1月の上の名簿によって、この時点での協会の会員169人のうち60人の職業を知ることができる(第1表)。これによれば80%以上のメン

第1表 ケムニッツ労働者教育協会成員の職業構成

職 業	成員数*	%
錠 前 工（機械仕上工）	21(17)	33.3
工場労働者	18(15)	28.6
鍛 冶 工	6 (5)	9.2
指物工・旋盤工	5 (4)	7.9
繊維労働者	4	6.4
（織布工2，捺染工2）		
機械製造工・組立工	2	3.2
機械操作工・鉄旋盤工	2	3.2
知識人・工場監督職員	2	3.2
（編集者1，紡績職長1）		

*（ ）内は工場（工場労働者の場合機械工場）で働いていたことの明らかな者
資料：Hofmann, S. 23 f.

バーが金属労働者であり、また工場で働く者が少なくとも過半数を占めている。協会の初代会長ヴィッティヒが工場錠前工（機械仕上工）であったことはすでにふれた。また後に出された協会の加入勧誘広告には、「協会にはすべての業種のすべての品行方正な労働者（機械製造工のみでなく）が加入しうる」（強調筆者）と書かれている。協会の中心を成すのは機械工業労働者であった。

協会成員の職業構成については、さらに小営業者がほとんど存在しないこと、また本来の手工業職人がわずかにすぎないことが注目される。この点については、ケムニッツの場合すでに手工業者協会が存在し、小営業者はあらかじめこれに組織されていたことを顧慮せねばならない。一般には、特に南ドイツ等工業発展の遅れた地域を中心に、多くの手工業職人・小親方層が労働者協会に加わっていた。例えばオルデンプルク労働者教育協会の規約（1864年）は、「当地で働く手工業者」を協会による教育活動の対象としている。またマクデブルク労働者協会の規約（1863年）によれば、協会は「手工業者と労働者によって」¹⁵⁾設立された。プロイセンの手工業者・労働者協会等に関するある調査によれば、1864年末の時点で62団体の成員13,324人のうち、自営業者は6,169人、労働者（Arbeitnehmer）は6,144人、その他（教師・法律家・官吏等）が1,011人であった。さらにこのうち36の団体については、成員の職業構成をより詳しく知ることができる。それによれば9,200人ほどの成員中、手工業職人41.5%，手工業親方

28.2%，商人10%，商店員5.7%，工場労働者・日雇2.7%，農民および農業労働者2.3%，それ以外はすべて1%未満であった。ただし以上の諸団体のうちには「労働者協会」と見なしえないものも多数含まれており、VDAVに属する9つの団体のみを見れば、自営業者813人，その他181人に対し，労働者が2,374人と圧倒的多数を占めている¹⁶⁾。

特にドイツにおける工業発展の最先進地帯であるザクセンでは，ほとんどの労働者協会で，工場ないしそれに類する作業場の労働者がとりわけ多くを数えた，と言われる。例えばライプツィヒの「前進」では，当市にあるバイエルン＝バーンホフの機械工場の労働者が会員中の過半を占めている。またライプツィヒ中央委員会のメンバーの多くもこの工場の労働者であった¹⁷⁾。上に見たケムニッツ労働者協会の会員構成は，ザクセンのこのような特色の一例をなすものと言ってよい。

もっともケムニッツ労働者協会に結集した工場労働者の大半は，熟練労働者であったと考えられる。再び第1表に戻って協会成員の職業構成を見ると，恐らく不熟練の補助労働者と考えられる「工場労働者」に対して，錠前工（機械仕上工）・鍛冶工など手工業的熟練を備えた労働者がかなりの優位を占めている。機械工業労働者が協会の中心勢力を成すという先の指摘に加えて，われわれはさらに，まさにこのような「手工業的工場熟練労働者」¹⁸⁾が協会の中核を成していたことを確認しておこう。

ところで労働者運動における「手工業者」的要素と「労働者」的要素の混在は，当時における「労働者」概念の理論的規定にも反映していた。ライプツィヒ中央委員会の設置とともにその相談役となった E. A. ロスマスラー (Rosmäbler) は，彼が執筆した1862年12月の中央委員会の綱領文書のなかで，親方層をも「労働者」(Arbeiter)のうちに含めている。彼によれば，一人の労働者も雇わないきわめて多くの親方層は，「自分の労働でのみ生活する者」としてまさに「労働者」に他ならず，「独立」か「非独立」という区分は「労働者」の概念規定として有効ではない。しかしこのような「労働者」の定義をめぐっては中央委員会内部で対立が生じ，結局「非独立」の賃労働者にこれを

限定するファールタイヒの意見が勝利を収めた。理論的にどれほど厳密かという問題はさておき、ここにおける「階級概念」の導入は、労働者運動の新たな段階の到来を告げている。¹⁹⁾

さて、上に職業構成を確認した60人にさらに3人を加えたケムニッツ労働者教育協会の会員について、今度はその年齢構成を見ておこう。結果は18—29才の者が37人（58.7%）、30—39才が12人（19.1%）、40—49才が9人（14.3%）、50才以上が1人（6.4%）、不明が1人（1.6%）で、約50%が既婚者であった。見られるように、比較的若い労働者が多数を占めている。他の労働者協会について会員の年齢構成が知られる例はわずかにすぎないが、例えばライプツィヒの「前進」では、1862年8月の時点で年齢の判明する107人のメンバーのうち、20—30才が51.4%、30—40才が37.38%、40才以上が11.21%であった。ここでも30才以下の層が会員の過半数を占めているが、ただしケムニッツと比べると30—40才層の数が多い。²⁰⁾

労働者協会会員の年齢構成は、とりわけ三月革命期との人的連続性の問題を考える上で重要である。一般に三月革命期には、20才から30才までの比較的若い層が労働者組織に加わった者の大半を占めていたと言われる。1860年代にも同様の事実を確認しうるとはいえ、年齢構成は若干上にシフトしている。われわれは、革命を経験した世代が再度運動に加わったことを、その理由の一つにあげることができるだろう。²¹⁾ 1849年5月の労働者蜂起の時点で17才だった者は、1862年には30才になっている。そこで30才以上を革命を自覚的に経験した世代と考えれば、「前進」の場合その比率は48.59%に達している。ケムニッツの場合若い労働者の比率がより高いが、それでもメンバーの39.8%が革命を経験した世代に属することになる。

さらにケムニッツ労働者教育協会会員の何人かについては、革命期の活動を実際に確認しうる。例えば木型製造工（機械工場の熟練工）F. W. バーニッケル（Barnickel）は、すでに三月革命期に「機械製造工協会」、「祖国協会」、「労働者協会」、そして「一般アソツィアツィオン」の指導者の一人として活躍した。²²⁾ また工場旋盤工R. パーヒェ（Parche）は、1848年9月の暴動に加わり、警察

に検挙されている。彼は労働者教育協会規約の署名者の一人であり、従って協会結成にあたって中心的役割を果たしたことが知られる。これら「革命の闘士」を通じて、三月革命期の民主主義の精神が若い労働者に伝えられたと考えて誤りはないだろう。

次に協会の実際の活動を見ておこう。規約に示された通り、活動の中心は何よりも労働者の教育にあった。1863年に労働者教育協会で行われた講演の内容を見ると、ロンドン工業博覧会、物理学、空気、解放戦争の歌手たち、スイスの協同組合制度、熱と力、鉄、ライプツィヒ体操祭、諸国民戦争記念祭、営業裁判所、栄養素、ゴムという12の演題が並んでいる。講演者となったのは技師、教師、弁護士、体操協会員、新聞編集者等である。このような講演の夕べと並んで、協会は筆記・算数・製図を教える日曜学校を開いた。同年7月の時点で30—40人のクラスが2つあり、毎週日曜10時から12時まで授業が行われた。後には平日の夕方に授業が開かれることもあった。ただし講演者および教師の確保は容易ではなかったらしい。協会はその他に小さな図書室を設け、社交の夕べを開き、また1863年末には消費協同組合も設立した。ただしこの協同組合には、当初27人が加入したにすぎない。²⁴⁾

教育等の非政治的活動への専念は、とくに1863年5月にヴィッティヒが会長を退いてから一層顕著になったようである。ヴィッティヒは当時、公開労働者集会の指導者、機械製造工代表団の議長として労働者運動に積極的に関わっており、これが協会内で問題になったものと思われる。彼に代わったG. T. シュヴァルツェ (Schwartz) は「ドイツ工業新聞」の共同編集者であり、労働者教育協会に対するブルジョア自由主義者の影響が一層強まったと言ってよい。²⁵⁾

ただしわれわれは、ケムニッツの労働者の関心が教育等に限られず、協会の規約が排除した政治問題にも及んでいたことを知っておく必要がある。この点をまず、労働者教育協会にわずかに遅れて結成されたケムニッツ進歩協会 (Chemnitzer Fortschrittsverein) の状況から確認しておこう。

1863年2月に結成された進歩協会は、労働者教育協会と異なり、「公的諸問題の議論」を目的に掲げる政治結社であった。ケムニッツのみならずライプツ

ィヒなどいくつかの地区で結成され、いわば国民協会の支店としてドイツ統一運動、あるいは憲法紛争等の問題にとりくんだ。協会の会長となったのは先述のレヴィッツァーであり、他に国民協会の主要なメンバーがほとんどすべて関わっている。もっとも1863/64年のデンマーク戦争が終わるとドイツ統一をめぐる政治的興奮は過ぎ去り、進歩協会は、国民協会ともども1865年半ばにはほとんど活動停止の状態に陥²⁶⁾った。われわれにとって重要なのは、この進歩協会にかなりの数の労働者が参加していたという事実である。

まず成立時の進歩協会成員278人の職業構成を見れば、次の通りである。すなわち商人・旅館（居酒屋）主人＝64人（23.0%）、労働者＝36人（12.9%）、織布親方＝24人（8.6%）、工場主＝23人（8.3%）、靴屋親方＝20人（7.2%）、編集者・芸術家・書店主・教師・医師・弁護士＝18人（6.5%）、技師・化学者・エンジニア＝11人（4.0%）、指物親方＝11人（4.0%）、仕立親方＝10人（3.6%）、職長・監督＝8人（2.9%）、その他の手工業親方＝26人（9.4%）、商店員・商品発送係・市職員＝9人（3.2%）、その他＝13人（4.6%）。全体として見れば協会は、商人・手工業親方・工場主層、そして小ブル知識人を中心とする自由主義者・民主主義者の政治組織であったと言える。

ただし協会の成員中、労働者も36人とかなりの数を占めている。国民協会が、労働者のくりかえしの要請にもかかわらず会費の引き下げを拒んだのに対し、進歩協会の会費は労働者教育協会の会費とほぼ同額であり、労働者にも開かれた組織となっていた。この点を前提としたうえで、多くの労働者の加入は、政治問題に対する彼らの関心の高さを示すものと言える。しかも進歩協会に加わった労働者の半数近く（17人）が同時に労働者教育協会の成員でもあった。上の36人の職業構成を示せば以下の通りである（かっこ内は同時に労働者教育協会に加入する者の数）。すなわち機械製造工＝11人（5）、錠前工（機械仕上工）＝8人（4）、鉄旋盤工＝6人（3）、工場鍛冶工＝4人（3）、旋盤工＝3人（1）、銅鍛冶工＝1人（1）、雑役労働者＝1人（0）、やすり製造工＝1人（²⁷⁾0）。労働者教育協会の中心を成す熟練の機械工業労働者が、政治的に最も積極的な労働者集団であったことをわれわれは確認しうるだろう。

さらにわれわれは、労働者教育協会が、労働者の利害を代表する唯一の形態とは見なされなくなっていたことに注意せねばならない。すでに1864年の半ばには協会の影響力はかなり低下していた。労働者およびそれ以外の層の参加がわずかである、と協会の指導部自身認めている。また同年8月には、市内の機械工場ならびに鑄鉄所で働くすべての労働者の集会在、協会とは別個に召集された。集会のよびかけ人となったのは、かつての労働者教育協会会長ヴィッティヒである。同様の集会は対象をすべての労働者に拡大して9・10月にも開催され、特に疾病金庫・遍歴援助金庫の問題が議論された。これらの労働者集会在が政治集会在となることはなかったが、しかし労働者は、いまや自由主義的名望家層と離れた独自の動きを進めつつあったのである。²⁸⁾

以上ケムニッツ労働者教育協会に関する検討をまとめれば、まずここに結集した労働者の中心は、機械工業で働く「手工業的工場熟練工」であった。協会の目的は労働者の教育＝教養の獲得にあり、教育を中心とする労働者の自助、「市民」への向上というブルジョア自由主義者の理念が、労働者のあいだでもなお支配的であったことが知られる。もっともこの両者の関係が完全に調和的であったわけではない。進歩協会の結成は、労働者の運動が政治的に独立することを阻み、これを自身の掌中にとどめようとする自由主義的名望家層の試みであった、と解釈することも可能である。また労働者教育協会とは別個に、労働者独自の組織活動も展開しつつあった。さらに労働の現場に目を移せば、雇主と労働者の対立は覆いがたい現実となっていた。1862/63年の工場規則導入をめぐる機械工業労働者の闘争、そして彼らによる協同組合工場の設立はその端的な現れである。以下われわれは、この過程を検討することにしよう。

- 1) 三月革命期におけるケムニッツの労働者運動については、拙稿「〈アソツィアツィオン〉」、Ⅲを参照。なお以下の叙述は特に注記のない限り、E. Hofmann, *Die Entwicklung der Arbeiterbewegung in Chemnitz zwischen 1862 und 1866, Karl-Marx-Stadt 1982 (Beiträge zur Heimatgeschichte von Karl-Marx-Stadt=BHK, Heft 25), S. 12-18* による。
- 2) Bericht über die fünfzigjährige Wirksamkeit des Handwerkervereins in Chemnitz, Chemnitz 1879, S. 12-15, 33, 157 f., 173, 188 f., 193.

- 3) 当時民衆教育（Volkshbildung）は下層民のための教育と考えられ、他の階層の教育とは区別されていた。Birker, S. 33.
- 4) この会議について、藤本建夫『ドイツ帝国財政の社会史』時潮社、1984年、第1章を参照。
- 5) R. Strauss, Die Lage und die Bewegung der Chemnitzer Arbeiter in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts, Berlin (O) 1960, S. 134 f., 133 f., 35 f.
- 6) Ebd., S. 251, 310, 313, 321, 341.
- 7) W. Conze/D. Groh, Die Arbeiterbewegung in der nationalen Bewegung. Die deutsche Sozialdemokratie vor, während und nach der Reichsgründung, Stuttgart 1966, S. 44 f.
- 8) W. Just, Die Stellung der Chemnitzer Bourgeoisie zur nationalstaatlichen Einigung 1859-1867, Diplomarbeit Pädagogische Hochschule Dresden 1970, S. 48 f.
- 9) Hofmann, S. 48 f.
- 10) 以下の叙述は特に注記のないかぎり、Ebd., S. 18-21による。
- 11) S. Na'aman (unter Mitwirkung von H.-P. Harstick), Die Konstituierung der deutschen Arbeiterbewegung 1862/63. Darstellung und Dokumentation, Assen 1975, Dok. 112.
- 12) Offermann, Arbeiterbewegung, S. 374-380. 当時なお自由主義の枠内にあったベーベルは営業教育協会に属し、労働者会議召集の運動からも途中で離脱している。
- 13) 政治・宗教問題の排除は、マクデブルク・フライブルク・マンハイムの労働者教育協会の規約にも明記されている。Ebd., S. 550 ff.
- 14) Berichte der VDAV, S. 6, 164 ; Allgemeine Deutscher Arbeiter-Zeitung (Coburger Arbeiterzeitung = CAZ, ND Leipzig 1977), Nr. 140, 3. 9. 1865, S. 761. 比較のために他の地区の組織の成員数をあげておく。ベルリン手工業者協会=10,135人（1861—62年）。ベルリン労働者協会=250人（1864年）。エェフルト手工業者協会=526人（1862年）。マクデブルク労働者教育協会=1,187人（1865年2月）。ハノーファー労働者協会=753人（1860—61年）。イェーファー労働者協会=120人（1864年）。ホルシュタインでは15団体が2,092人の成員を擁する（1868年）。ライプツィヒ労働者協会「前進」111人（1862年8月）。ハーナウ労働者教育協会=420人（1864年）。ギーセン労働者教育協会=132人（1866—67年）。ハイデルベルク労働者教育協会=287人（1863年5月—64年4月）。カールスルーエ労働者教育協会=196人（1863年10月）。プフォルツハイム労働者教育協会=466人（1863年10月）。シュトゥットガルト労働者教育協会=622人（1863年）。ウ

- ルム労働者教育協会=84人（1862年）。Offermann, Arbeiterbewegung, S. 525 ff.
- 15) Ebd., S. 550.
 - 16) Birker, S. 140 f. ただし個々の数値はビルカーの依拠した原資料, G. F. Bandow/H. Brämer, Die Handwerker-, Arbeiter- und ähnlichen Vereine in Preußen, in: Der Arbeiterfreund 4 (1866), S. 77-81 によって修正してある。
 - 17) Offermann, Arbeiterbewegung, S. 307 f., 377 f., 396.
 - 18) 「手工業的工場熟練工」の概念について, 拙稿「産業革命期」, 349 頁を参照。
 - 19) Offermann, Arbeiterbewegung, S. 398 f., 550 ; Na'aman, Konstituierung, Dok. 116 (S. 366 f.); Ders., Demokratische und Soziale Impulse in der Frühgeschichte der deutschen Arbeiterbewegung der Jahre 1862/63, Wiesbaden 1969, S. 56 f.
 - 20) Offermann, Arbeiterbewegung, S. 543.
 - 21) Birker, S. 139 f.
 - 22) これらの組織については, 拙稿「〈アツツィアツィオン〉」, 15-17頁を参照。
 - 23) Vgl. Na'aman, Konstituierung, Dok. 45 ; CAZ, Nr. 140, 3. 9. 1865, S. 761.
 - 24) Hofmann, S. 40 f.
 - 25) Ebd., S. 37.
 - 26) Ebd., S. 49.
 - 27) 数値の合計は35人にしかならないが, 資料のままにしておく。Ebd., S. 27.
 - 28) Ebd., S. 44 f., 50.